

大学生が認知した両親の夫婦間葛藤が現在の親密な他者との 対人葛藤方略に及ぼす影響

— 両親の夫婦間葛藤の要因が自分に起因することに着目して —

本研究では両親の夫婦間葛藤が子どもの対人葛藤方略に与える影響について検討するため、質問紙調査を行った。先行研究において、多くの研究が両親の不和が子どもの精神的健康に影響を与えることを明らかにしており、(Neighbors, Forehand, & Bau, 1997; Davies, Dumenci, & Windle, 1999; Jouriles, Murphy & O'leary, 1989)、子どもの精神的健康について検討するにあたって、両親の関係性は重要な要因であると考えられる。

そして、両親の関係性が子どもに与える影響について検討する際に、両親の関係性を子どもがどのように認知しているかに注目することも重要であることが先行研究の結果から考えられる(宇都宮, 2005; 伊藤, 2001; 伊藤, 2008; 山本・伊藤, 2012; 川島・眞榮城・菅原・酒井・伊藤, 2008)。また、子どもの精神的健康に影響を与えているのは、対人関係の在り方も重要な要因であることを先行研究は示している(加藤, 2003; Stephenson & Andrew, 2013; 加藤, 2007; Zhang, 2007)。しかし、両親間の葛藤が子どもの葛藤方略に与える影響については検討されていない。そこで、本研究では仮説としては、両親間の不和に対する子ども側の認知がネガティブなものであるほど、回避的な対人葛藤方略や自己中心的な対人葛藤方略を選択すると考え、両親間の不和に対する子ども側の認知が子どもの重要な他者・恋人との対人葛藤方略の違いに与える影響について検討した。近畿圏の私立大学在学中の学生399名に対して質問紙による調査を行った。質問紙は、「両親の不仲な場面とは、『両親のどちらかあるいはお互いが無視をしたり怒りだしたりする、言い争いになる』等」と定義を示したうえで「両親の不仲な場면을イメージしてください。」と文章で教示した後で両親間の力関係のバランス・不仲場面の頻度・回答者が感じる不仲の原因に自分がどの程度関与していると思うか・原因は自分のどのような点にあると感じるかを回答させた。次に、山本・伊藤(2012)で作成された「子どもが認知した夫婦間葛藤尺度」からいくつか質問を抜粋した質問項目群に回答させた。そして、加藤(2003)で作成された対人葛藤方略スタイル尺度20項目を用いて、教示文を一部変え、親密な友人に対する対人葛藤スタイルと恋人に対する対人葛藤スタイル、それぞれについて回答を求めた。なお、両親がいない・恋人がいない回答者については、適宜質問紙に無回答でいように配慮を行った。分析結果からは、仮説に反して、両親間の不和に対する子ども側の認知がポジティブな認知であっても親密な友人との葛藤場面におけるポジティブな葛藤対処方略の使用傾向の低さに影響している一方で、ネガティブな方略の使用傾向の低さにも影響している可能性が示唆された。また、親密な友人との葛藤場面では男性は葛藤の相手である友人よりも自己を中心とした葛藤対処方略スタイルを選択しやすいが、恋人との葛藤場面においては葛藤相手である恋人を中心とした葛藤対処方略スタイルを選択しやすいという結果が明らかとなった。そして、両親の力関係の違いによる葛藤対処方略スタイルの違いから、Faの力がMoの力よりも強い場合に、恋人の意見を優先した葛藤対処方略を選択しやすいことが明らかとなった。